

## 住民が作り上げる「場」に関する研究 -千里文化センター「コラボひろば」を事例として-

正会員 ○ 永川裕樹<sup>\*1</sup> 同 鈴木毅<sup>\*2</sup> 同 松原茂樹<sup>\*3</sup> 同 木多道宏<sup>\*4</sup>

### 5. 建築計画—2. 施設計画-d. 集会・コミュニティ施設

#### 1. 研究の背景と目的

近年、住民が集まる場所が不足しているといった状況の中で、コミュニティカフェのような住民がボランティアで運営する施設が増えてきている。そういった場所では、様々な活動が行われる事によって、1つの場所でいくつもの「場」が展開されるようになってきている。千里ニュータウン（以下、千里 NT）の「コラボひろば」もそういった施設の1つである。ここではコミュニティカフェであるコラボカフェの横に多目的スペースが併設されており、これらを一体として利用することが出来る。また千里近辺のみでなく、幅広い地域のボランティア、NPO 経験者が集まることで、様々な活動が行われている。

本研究では、「コラボひろば」を運営者の目線から比較することで、千里 NTにおいて、現在住民にどのような場が必要とされてきているのかを明らかにする。

#### 2. 調査対象地

本研究では、千里 NT 中央地区に2008年に開館した千里文化センター「コラボ」（以下、コラボ）のメインエントランス脇に設けられている「コラボひろば」を対象とした。「コラボひろば」は、コラボの建て替え計画への住民の積極的な参加により設けられることとなり、2010年4月6日にオープンした。現在は豊中市による資金援助の下、住民が主体となって運営を行っており、ボランティアに対してコラボカフェでのみ使える地域通貨である「コラボ通貨」が支給されている。カフェスペースの日常の運営についてまとめたものを表1に示す。



図1.コラボカフェ（左）と多目的スペース（右）の様子

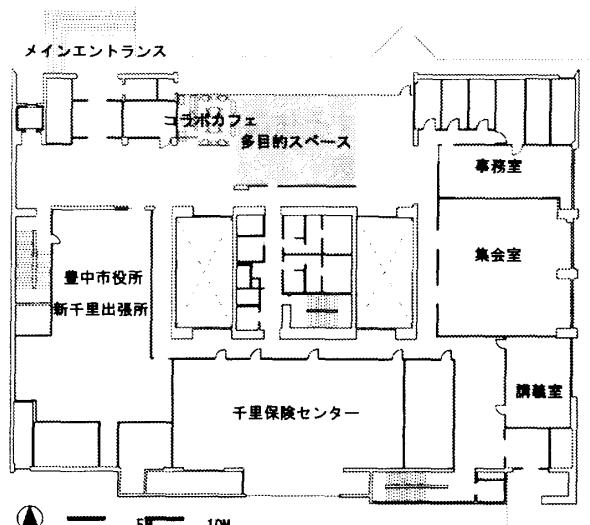


図2.千里文化センター2階平面図

表1.運営形式

オープン日時	火曜～土曜（日、月、祝日は休み） 午前10時～午後4時半
運営主体	千里文化センター市民実行委員会
運営スタッフ	コラボサポートー、現時50名程度
メニュー	コーヒー（クッキー付き）200円、紅茶（クッキー付き）200円、オレンジジュース100円、カルピス100円

#### 3. 調査方法

コラボひろばで活動している住民がどの様な経緯で活動を始め、どのような場所を必要としているの

かを明らかにするため、主となって活動している住民 9名へインタビューを行った。また、その他ボランティアの方々にもコラボひろばでの活動に関するアンケートを実施し、50名中 22名分の有効回答を得た。同時に不足情報を補うため現地での聞き込み調査も同時に行つた。それぞれの質問項目をまとめたものを表 2 示す。

表 2. インタビュー、アンケート内容

① 代表者 9名へのインタビュー
・ 住民活動を始めた経緯
・ 現在コラボひろばにおいて担当している活動の概要・経緯
・ 今後の方針
② ボランティアの方々へのアンケート、聞き込み調査
・ 年齢・性別・住まい
・ 活動内容
・ 活動頻度
・ 活動を始めたきっかけ・理由
・ 活動をやってみて感じた事

### 3. コラボひろばで活動する住民

#### 3-1. ボランティアの内訳

##### 住まい

アンケートより、千里近辺に住むボランティアが過半数を占めていたが、回答の得られた 22 名中 4 名が豊中市外から訪れていると答えた。また聞き込み調査において大阪市からボランティアへ訪れているという意見もうかがうことが出来、千里に限らず多くの住民の活動拠点となっていることが分かった。

##### 年齢

ボランティアの年齢層は大きく 30~40 代と 60~70 代の 2 つに分けられる。そのため、様々な価値観を持った人たちが一緒になって活動する様な場所となっている。

#### 3-2. 活動意識の違い

コラボひろばで活動するボランティアには、主体となって活動しているコラボ市民実行委員会と、それをサポートする立場として活動しているコラボサポーターの 2 種類が存在する。それらは豊中市の制度によって分けられているもので、定員、コラボひろばで行う活動の発案の可否などの点で大きく異なっている。(表 3)

そういう制度についてコラボひろばの代表である住民に意見をうかがつた。(表 4) その中で、二者

の間には大きな活動意識の違いが存在することが明らかになった。しかしこラボひろばでは主体となる住民がその他の人たちを誘導することで、活動そのものを楽しめる様な場づくりを目指している、という意見もうかがう事が出来た。

これを踏まえた上でコラボサポーターになった理由、活動を通して感じた事に関するアンケート回答を見てみると、楽しいという回答が共に過半数を占めている。このことから、コラボひろばでは、ボランティア活動そのものが交流の手段として用いられている事が推測される。

表 3. 市民実行委員とコラボサポーター

	市民実行委員	コラボサポーター
人数	20 名	80 名
定員	20 名	無し
募集方法	公募	随時募集
任期	5 年	無し
活動の発案	可	不可
活動意識	強	弱

表 4. 活動意識の違いに関する発言

ボランティアであくまでもお茶出しが楽しくててる人と、地域を変えようと思って来てる人、同じに考えるのはしんどいよって。そこはいろんなレベルのある人がいて、その人たちが一緒に楽しいと思える、場を作つてあげるとこがここなんだよって言う風に私も教育されて。そんなんやな、と。

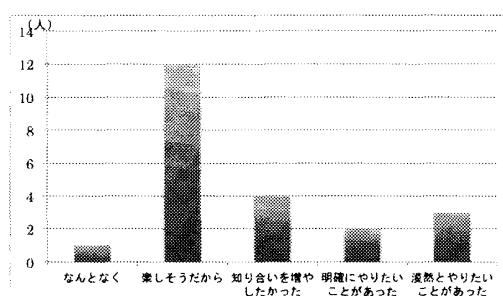


図 3. コラボサポーターになった理由

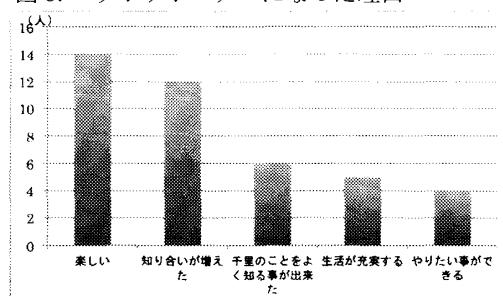


図 4. コラボサポーターとして活動した感想

## 4. 住民発意による活動

### 4-1. 活動の成立

コラボひろばで行われている活動は、全て1人、もしくは数名の住民による発案から行われている。

(図5) 発意のきっかけは、住民同士の会話、活動を通して必要だと考えたことなど様々である。それらに共通して言えることは、住民が今すぐ必要だと思われる活動が発意されているという事である。また豊中市がそれらの発案についてほとんど意見することなく、あくまでサポートする立場で関わっているために、コラボひろばでは発意した内容がそのまま実現する形が撮られている。つまり、発意そのものは単なる思いつきとも言えるような単純な内容でありながら必要にせまられたものであり、それらを具体化するプロセスにおいても秀でているコミュニティであると言える。

また主婦、NPO経験者等、様々な背景を持った人それぞれが提案した活動によって、タイプの異なる「場」が展開されることによって、コラボひろばは様々な人に対応した、非常に柔軟な活動を行っている場所だと言える。

### 4-2. 特徴的な活動

#### 転勤族カフェ

転勤族カフェは、千里において転勤族の居場所がないとして、コラボひろばで活動していた新規入居者3名が提案し、2012年4月から開始された。内容は転勤族ならではの悩み、不安等の「相談」、また、引っ越してきたばかりの人には、住民ならではの地域情報の伝達も行っている。

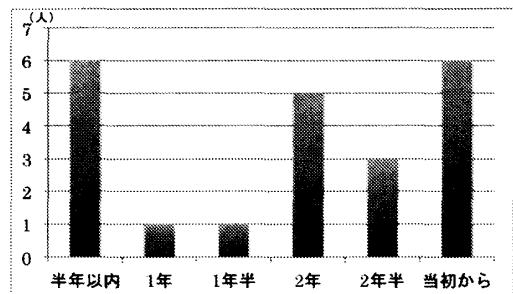


図6.コラボサポーターとしての活動期間

この活動が始まってから1年未満であるが、その期間中に多くの住民が、コラボサポーターとなってボランティア活動を始めている。(図6) 転勤族カフェの代表者の方へのインタビューによると、その内

	コラボ大学校	コラボ談話室	ラウンドテーブル	ボランティア応援コーナー
活動内容	ボランティアで市民講師を募り、講演を行ってもらう	市民による15分間の経験提供の後、その内容について参加者で話し合う	地域で行っている活動や成功事例を披露し合う情報交換の場	何か始めたいが何から手をつけたらいいか分からない人への情報提供
活動時間	毎月第2土曜日 14:00~16:15	毎月第1土曜日 10:00~12:00	毎月第4土曜日 14:00~16:00	毎月第2・第4火曜日
利用者	平均50名程度	15名前後	15名前後	2~3名程度
	多文化カフェ	絵本カフェ	転勤族カフェ	まちあるき
活動内容	外国の方を講師に招いて現地での生活や文化を聞く	実行委員や図書館の図書がテーマに沿った読み聞かせを行う	転勤族ならではの悩み等自由に話してもらう	千里の街を様々な説明をうけながら歩いてまちの魅力を再発見してもらう
活動時間	毎月第3火曜日 10:00~12:00	毎月第1金曜日 10:00~12:00	毎月第3金曜日 10:00~12:00	不定期
利用者	10名程度	10名程度	10名程度	15名前後

図5.コラボひろばで展開されている「場」

訳のほとんどが30~40代の主婦の方々であることが明らかになった。さらに現地調査の中で、転勤族カフェに訪れた方がコラボひろばで行われている他の活動に参加するなどの行動が見られ、コラボひろばが新規入居者の居場所になりつつあることが推測される。

### コラボ談話室

コラボ談話室は、千里にいる様々な経験・知識を持った住民の意見を聞きたいとして2011年の5月から始まった活動である。参加した市民の方に話題を提供してもらい、その内容について参加者で語り合うことを行っている。この中では、多世代の住民が議論し、お互いの価値観を擦り合わせるといった「対話」が行われている。そこで得た様々な意見は、新たに活動を進めていく上での参考として用いられており、多くの意見が必要とされるまちづくりにおいて、なくてはならない場となっている。

### 5. ひがしまち街角広場との比較

以上のこと踏まえて、千里において長く親しまれてきたコミュニティカフェである「ひがしまち街角広場」との違いを以下にまとめる。

#### 多地域・多世代の交流

街角広場では、主に東町近辺に住む住民、つまり比較的近隣に住む住民が集い、交流を行っていた。しかしこラボひろばでは、千里に留まらず幅広い地域から、またボランティア活動という媒体を通すことにより、主婦、NPO経験者、高齢者といった様々な人たちが交流する場となっている。またそういった柔軟な場所となっているために、今まであまり居場所が無かったと思われる新規入居者の居場所としても機能しつつある。

#### 多様な「話す」場

「話す」ということに着目すると、街角広場において必要とされていたのは、日常会話である「雑話」のみであった。こういった会話はコラボひろばで常設されているカフェでも行われており、このような

日常における楽しみは現在でも非常に重要であることが分かる。ただ、コラボひろばではそれに加えて様々な「相談」事業やコラボ談話室のような「対話」の場が現れてきている。つまり、徐々に住民が自分の意見を述べようという意識が高まってきているのである。

	雑話	相談	対話
内 容	さまざまな事柄をまとまりもなく語ること	問題の解決のために話し合ったり、他人の意見を聞いたりすること	各個人が自分固有の実感・体験・体条・価値観に基づいて何かを語ること
事 例	ひがしまち街角広場 コラボカフェ(常設) 多文化カフェ 松本カフェ まちあるき	ボランティア応援コーナー ラウンドテーブル 転勤族カフェ	コラボ講話室 コラボ大学校

図7.「話す」場としての分類

### 6. 住民活動のきっかけ

コラボひろばは、住民活動を交流の手段として利用する事で、活動を始めるきっかけとしての役割を果たしつつある。今後、新たに活動を始めた人たちが新しい目線から新たな「場」を展開していく事で、コラボひろばがより柔軟な場所となることを期待する。

【謝辞】調査へご協力いただきました千里文化センター実行委員会、コラボサポーター、豊中市職員のみなさまに心よりお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 豊田哲平「千里再生における計画決定プロセスに関する研究－千里中央地区再整備事業を事例として－」日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系 (46), 129-132, 2006
- 豊中市千里文化センター市民運営会議検討報告書、平成20~23年度,2009~2012
- 日本建築学会編「まちの居場所 まちの居場所をみつける/つくる」東洋書店,2010
- 平田オリザ「対話のレッスン」小学館,150-175,2001
- 中島義道「<対話>のない社会」PHP新書,100-136,1997

\*1 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 博士前期課程 Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University

\*2 大阪大学大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 准教授・博士(工学) Assoc. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.

\*3 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 助教・博士(工学) Assis. Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.

\*4 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 教授・博士(工学) Prof., Dept. of Global Architecture, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.